

# 日本のてっぺん花の浮島

業務部長 張 由紀  
総務部 三瓶 美和子

7月中旬、長引く梅雨の蒸し暑い東京を抜け出し、日本の最北端稚内へ向かった。当日の天候は、曇り。我々が到着するまでは晴天が続いていたとのこと。梅雨前線も一緒に連れてきてしまったのだらうと、からかわれながらこの日の行程は、北緯45度31分日本最北端、アルメリアが一面に咲いている宗谷岬を経て、走っても走っても一面の草原で、のんびりと草を食む長閑な牛たちの姿を時折見かけながらサロベツ原野へ。

見渡す限りに広がる緑の大海原サロベツ原野は、東西



エゾカンゾウ

7キロ、南北28キロ、その面積は2万3千ヘクタールに及ぶ。天塩川の河口にあり、その支流のサロベツ川が湿原の周りを蛇行しながら流れる。日本の低地における代表的な

湿原で、1年に1mmと気が遠くなるようなごくわずかな成長で堆積して出来た泥炭地は枯れた植物が積み重なり、約2万年もの歴史がある。そして、一度傷つけられると2度と回復することはない。そんなデリケートな湿原にも春の訪れを聞く5月から8月下旬ごろまで、色とりどりの花々で彩られる。我々が訪れた時期、花はエゾカンゾウが山場を越えたあたりだったが、その原野の広大さには圧倒された。

帰路は、日本海を横目にオロロンラインを北上。利尻礼文サロベツ国立公園の中でも景勝地の一つである浜湧知には俳優の森繁久弥氏の歌碑が立っており「浜茄子の咲きみたれたるサロベツの砂丘の涯ての海に立つ富士」と読まれているように、利尻富士の端正な姿が見えるはずなのだが、この日は曇りのため霞の中に溶けてしまっていた。



サロベツ川

翌日は礼文島へ出発した。稚内港から、フェリーで2時間。香深港へ到着し、そのまま車で北へ20分程度。島の最北、スコトン岬に到着。鋭い刃のように突き出した先端の断崖まで行くと7月といっても海岸沿いは特に寒く、風が厳しく吹き荒れる中での眺めは「日本最果ての島、道ここに尽きる」といった緊張感があつた。

“花の浮島”礼文島には三百種類を越す高山植物があると言われ、通常、高地でしかお目にかかれない植物に、ここでは0m地帯の平地でも出会うことができる。一様に、美しくたおやかな容姿を持つ彼女達は、しかしながらはるか氷河時代から過酷な環境を生き抜いてきたこの島の住民である。現地では、礼文の名を冠したレブンウスユキソウ、別名エーデルワイス、鮮やかなオレンジ色のレブンキンバイソウ、タンポポそっくりのフタミナソウ等々、実に豊かな植生を見ることが出来た。しかし、標高250m位の桃岩展望台では、西海岸の怪石・奇石を一望すべく頂上を目指したが、突如発生した霧に視界を阻まれ何も見ることがかなわず。下り、我々の徒労にささくれた心を一面に咲くスティックキャンディーのようなイブキトラノオが風に煽られつつもやさしく慰めてくれた。



レブンキンバイソウ

夏の観光シーズンである一番良い時期、島は穏やかな表情を見せている。しかし、冬、海が荒れるとフェリーや飛行機の交通が途絶え、一週間近くも孤立することもあるという。それでも慌てず騒がず日常生活を送る島の人々には、便利な生活になれなかった我々にはない強さと逞しさを感じた。



礼文島の奇石、猫岩